

湘南オープンウォータースイミング 2010 大会報告

2010 年 8 月 29 日天候晴れ、水温 27 度

スタート 2 時間前に到着。早すぎる到着でひたすら暑い海岸で待機。車の影に身を潜めたり、海に入って身体を冷やしたりしたけれど、競技より疲れが出てしまいそう。

応援をする人々は車の影やら、テントの影に身を寄せ、選手に手を振ったりカメラでパシャリと元気にはしゃいでいる。

私が身を潜めている車の影に、生まれて 4 ヶ月になる赤子を抱っこしている子供のようなお母さん。同じように赤ちゃんを抱いているがいるお姉さんもいる。それぞれのお父さんらしき若者。そのお母さんと派手な関係者がバラバラ。

ずいぶん大人数だが一体誰が泳ぐ人？聞けばおばあちゃんの妹だそう。そういえば、盛り上がった筋肉どうだいと、自慢したくなるような力強いおばさんがさっき横にいたな。ウエットスーツに身を固めているので更に頑強そうで怖い。肝っ玉母さんと見たな。ウエットスーツから出ている部分はクラゲ対策のためか白いクリームがべったり塗られている。そんなおばさんをぼんやり見ていると、中年を少しばかり過ぎた京都の舞妓さんが、ウエットスーツに身を固めて、「これでどうやす」と言わんばかりに元気だし立派な身体だなー。

スタート 1 時間前には荷物を預けるので靴も、時計もはずされ、メガネまで外しているので、もう何の楽しみもない、ただ生きているために泳がされる希望を失って泡を吹いている魚同然である。

思えば今年の夏もよく泳いだものだ。毎日空いた時間に自転車で海まで向かい、太平洋を真っ二つにする勢いで沖に向かって全速力で泳ぐ。波が静かな時は矢のように速い。

時には、海面一帯白波が立ち、激しい風と波が吹きつけている海面でも泳いでいかねばならない。そこに素裸のまま縄で縛られ、木に逆さにつるされ、まもなくおいしそうに食べられてしまう、美しい兵士を救い出す任務を背負って進む者のように。

強風になれば、ウインドサーファーが飛ぶように海面を走り抜ける。

水上スクーターが轟音と共に怒り狂ったオオカミのように獲物を探し、海上を駆け抜ける。

漁船が魚を求めて右往左往と行き交う。ここは危険水域なのだ。そんな海を私は命知らずの冒険者のように泳ぐ毎日である。

身体は真っ黒に日焼けをし、前も後ろも見分けがつかない焼き魚である私。この荒れた海の上で、彼らに私を確認して頂けるだろうか？

今、オープンウォーター大会の参加者を眺めていると真っ白い美肌をした女性もいる。一体どういう事？「始めて太陽の下に出てきて太陽が眩しいわ、海で泳ぐのは今日が初めて」と言われそう。しかし、いざレースになってみると、こうした白魚のような美人が俄然早かったりするので女は侮れない。

白が勝か、黒が勝ちかを競い合っているわけではないが、黒が強そうに見えるし、白には負けたくない。などと眺めていると、白魚のような身体が何処かへ隠れ去った。

第一グループのスタートから、1時間半が経過し、風もやや吹き始め、うねりも少し出てきているようだ。しかしこの程度では私の有利にはならない。

崩れる波に身体を持って行かれそうになりながら泳いできた私だ。頑張ってくれ。ただ、荒海を乗り切るには、泳ぎのうまさだけでは乗り切れない。ひたすら恐怖に打ち勝ち、平常心を保ち続ける泳ぎだけが自分を救う唯一の方法なのだ。

海は毎日表情を変える。無理はできない。しかし毎日水に入って魚になりきってしまえば、台風でも乗り切ることができるだろう。

海上を矢のように泳ぐ私にとって、大荒れで中止ギリギリまで、ぼろくそに荒れ狂ってほしいものだ。参加者 500 人。完泳者 3 人で、金、銀、銅メダルなんて大会だったら最高だ。

そんな中に私の名前は無いだろう。やっぱり、危ない時は避ける勇気が本当の勇気なのだから。

今、海から富士山が見え、江ノ島の灯台が間近に迫っていて、まさに本日は晴天なり。

眩暈がするほど長く暑い時間が経過し、スタートのブオーンの合図だ。

ウォーミングアップをすることなく、芋洗い同然のごった返しの、まぜこぜの海の中をスタートだ。

今年は七里が浜から、500 メートル沖合に打たれた黄色いブイを右に回り、江ノ島灯台に向かって 1.500 メートル進んだところに打たれた黄色のブイを右に折れ、江ノ島海水浴場のゴールまでの 2.500 メートルのレースである。

スタート時点の押し合いへし合いはいつもすごい。どうにもうまい手がないので芋洗いに混じる。

そんなにムキになって前に出なくてもいいのにと考えるが、群衆の波は力強く、流れに棹さす動きを許さない。前に出した右手が隣のスイマーの背中の上に乗っかり、水をかく事もできないまま相手を右に押し流す。手と手がぶつかり泳げない窮屈さにいらだち、左に避ければ後ろからのスイマーが背中に乗っかってくる。スピードをゆるめれば後ろのスイマーの手が私のバタ足をつかみ、ひっかかってくる。もうやめてくれ！遅いスイマーが邪魔で泳げない。かき分け、かき分け前に出ようとするが、さらに早いスイマーが私につかみかかってくる。

大学時代ボクシング部の後輩で山本新治というすごい人物がいた。網走の刑務所を何度も脱獄し、俳優の高倉健と一日中殴り合いをして、網走番外地を我が物顔で歩いていた様な雰囲気を持った男だ。かなり髭は濃いぞ。外観はともかく、心根の優しい男なのだ。

そんな彼の泳ぎは、見応えのある素晴らしいものらしい。勤めが終わった後、日々トレーニングジムで走ったり、泳いだりの練習をしているそうである。その泳ぎは25メートルを進む内、おぼれる者が藁をつかむように、喘ぎながら助けを求め、必死に進むようだったと、彼の泳ぎをよく知る小林伊久雄が私に教えてくれた。素晴らしい。小林伊久雄も又、ボクシング部の後輩だが共に年齢は私と同じである。彼の泳ぎは速い、水面をホースで水を打つように、一直線に進む泳ぎはただ者ではない。私が水泳自慢をするたびに、すごい！素晴らしいですねーと口で言いつつ、彼の目が「甘いな、俺の方がまだまだ速い」、ふっふっと笑っているのが感じられて悔しい。

スタート直後の混戦状況は、まさに山本新治の泳ぎのようだ。彼の泳法はこんな感じなのかもしれないと思いながら我慢の泳ぎを続けた。

右も左も、前も後ろも人、人、人。今年はインコースを泳いでいるせいか500メートル先の黄色のブイまで人が密集しているようだ。

鳴門の渦に巻き込まれた、活きの悪い魚のようにてんやわんやだ。やっと最初のブイに近づき、ゆっくり右に旋回しながら江ノ島灯台に向かって直線コースに入る。最後のブイは江ノ島灯台の右手にあるはずだ。泳いでいる今は何も見えない。見えない目標に向かってひたすら進めばいい。

私の廻りにはスイマーが群れをなして泳いでいる。いい感じだ。うねりの影響もあってかヘッドアップしても目標物が見えない。

さらにスイマーがたびたび右や左から接触してくるので直進しているはずの私が実は蛇行して泳いでいるのではないか？それとも相手が蛇行してぶつかってくるのか、心配になってくる。5回ほどの息継ぎの後ヘッドアップして廻りを確認するのだが、正確な進路が確認できない。

人生と同じで正しい進路の選択は、難しくも厳しいものである。

時々まわりのスイマーの大きな流れが、わずかに右寄りに旋回するに至っては、不安が襲ってくる。

最近の私の泳ぎは左右にぶれない直進性に自信を持っているのだ。他人に惑わされたくない。しかし、うねりが入っているのと風が左から入っている事、潮の流れが江ノ島の方に流れているので、流されている可能性もある。わずかのぶれでも長い距離になれば大きく時間のロスが生じると考えると突然心配になる。しかし一体何が起きているのだ。

やがて私の前を、安定したピッチで泳いでいくスイマーに遭遇。よし、このスイマーをペースメーカーとしよう。そう決めてピッタリマークすると、今まで不安を抱えていた泳ぎや、ヘッドアップによるロスも全く考えなくて済む。泳ぎがずいぶん楽なものになってきた。

ヘッドアップして場所の確認をするのは、スピードのロスになる。しっかり目標を確かめようとすれば、泳ぎのバランスを狂わせスピードが落ちる。ペースメーカーにピッタリくっついていればその必要が無いのだ。

目標の確認から解放されたわたしは、ペースメーカーの足の指先に手が触れるか否かのギリギリを泳いでいるだけだから、泳ぎのペースが取りやすい。身体が楽になり、疲れが出ない。さらにペースメーカーのバタ足から引き起こされた泡で私の身体に浮力が加わり、なめらかにスピードが乗っていく。彼女が方向確認のヘッドアップするたびスピードがやや落ちる。その時、右に身体半分ずれて前に泳ぎ、再び足下に下がる。そんな繰り返しでスムーズに泳ぐ中で、一人、又一人と抜き去っていくのが快い。このペースメーカーはずいぶん早いぞ。

フルウェットスーツを着ているが足下に白いラインが入っているので確認しやすい。最高だ。江ノ島の灯台にグングン接近。近くにヨットの姿も確認。目標の黄色のブイまで残りわずかの所まで来たようだ。ペースメーカーのスピー

ドも幾分アップしてきている。それいけスマートといったところか。

江ノ島の長い橋が目前にあるが、ピッチを上げても、上げても、黄色のブイが近づいてこない。どうしてだろう。誰かこっそり持ち去ったか！もうそろそろ見えてもいい頃なのだが。白いヨットの船体が見えているので近いはずなのだが・・・

と、突然ブイに接近。左で息継ぎをしているので斜め右のブイは死角になっていたのか。いや前を見てなかったからか？ペースメーカーの足しか見ていないのだから当然か。

ブイのロープに手が引っかかり、もつれながら黄色いブイを手で押しのけ、黄色いブイをクリアー。ブイを右に曲がった後は直線コース。と思いきやペースメーカーはさらに右に曲がりながら進んでいく。おいおいペースメーカーどこへ行く！戻ってこい！江ノ島の海水浴場は広いのでどこがゴールか分からない。

ペースメーカーを探し必死でその足を追いかける。スピードがさらにアップしているようだ。全速力で追跡するもじりじり引き離されていく。

水が濁ってきてペースメーカーの足が見えにくくなってきた。やがてペースメーカーの足は濁り水の中に消えていく。海水浴場になるぐらいだから波はなく、海はプール状態にフラットになっている。そしてペースメーカーの泳ぎはますます早くなっていく。うねりのあるところでは見せなかったスピードがここでは全速力となって進んでいく。残ったガソリンを全部使うぞとばかりにエンジン全開のようだ。

私としてもここまで来て離されてなるものかと、手のかきを3倍速にアップ。腕が引きちぎれる程の回転力で前進。やがて腕をつないでいる細かい歯車の一部がきしみ始め、油が充分に回っていないのか、何処かのギヤーがピシピシ折れそうな感じだ。そこで、更に奥に仕舞い込んであった大きめのギヤーを引っ張り出し全速力で海上を疾走する。ペースメーカーは濁った水の中、やや右手前方に姿をくらました。

ゴールがどこにあるのか分からないが、もうそんなの関係ねえ、とばかりにガンガン飛ばす。気づけば手が砂をつかんでいる。

立ち上がれ日本なんて言うのがあったが、波を蹴って砂浜に前進！ゴール前で係員が2,5キロはこっちだよ！と叫んでいる。すかさず前の選手を抜こうとすると抜かないで下さい！と叫ぶ。意味が分からないので構わず抜き去る。さ

らに、その前の選手も抜こうとすると、再び抜かないで下さい！と叫んでいる。
目の前 1 メートルが計測の踏み板なので、抜くのはやめて、渋々先を譲りゴールイン。でもなぜ抜いてはいけないのだろう？

ゴールを通り過ぎると、いよいよメダルを首に掛けてくれるお姉さんがいる。
今年も銀メダルようだ。2010 FINISHER と刻まれている。

2.5 キロレース 記録 1 時間 07 分 40 秒

この記録を見て遅い！と思ったのだが、昨年の湘南オープンウオータースイム大会の記録を分析してみたところ思いがけない事実が判明。

昨年 60 代の部に参加し、今年も続けて参加した人は 16 名。この 16 名の順位が変わらないのだ。日々、全員が努力をしていたのだ。今日の順位は一年間の戦いの順位だったのだ。この事実には唖然としてしまった。

さらに分析を試みると、興味深い事実が判明。 昨年の大会でゴール間際の砂浜で抜き去り、1 秒の差で負かした相手「脇薫」氏 61 才がいた。・・・記録 1 時間 15 分 58 秒・・・私とのその差「8 分 18 秒」・・・私は大いなる進化をしていたのだ。

この事実を発見し、ひとり、小さな部屋を暗くして、ググッと嬉しそうにほほをゆるめてしまった。さらに机の上で寝ている猫の「ミルク」ちゃんのお腹を、ぎゅ、ぎゅ、ぎゅ、と掴んで喜ばせてしまう、いけない私なのだ。

さあ、次の湘南国際マラソンが私を呼んでいるので行ってこよう。

三枝樹